

# Whoops!

多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

[ウーブス!]

## 2014 AUTUMN Vol.8

### TAKE FREE

TAMABI REPORT

平野啓一郎 西牟田靖

Whoops!用語事典

Neb aaran do by ネバアランド 倉敷本染手織研究所

あっ!の人たち

チームラボ 都築響一

東小雪 中村京蔵

Whoops!見聞録

大嶋修一 岡田聡

zoom up

畑山太志



祝!  
芸術祭

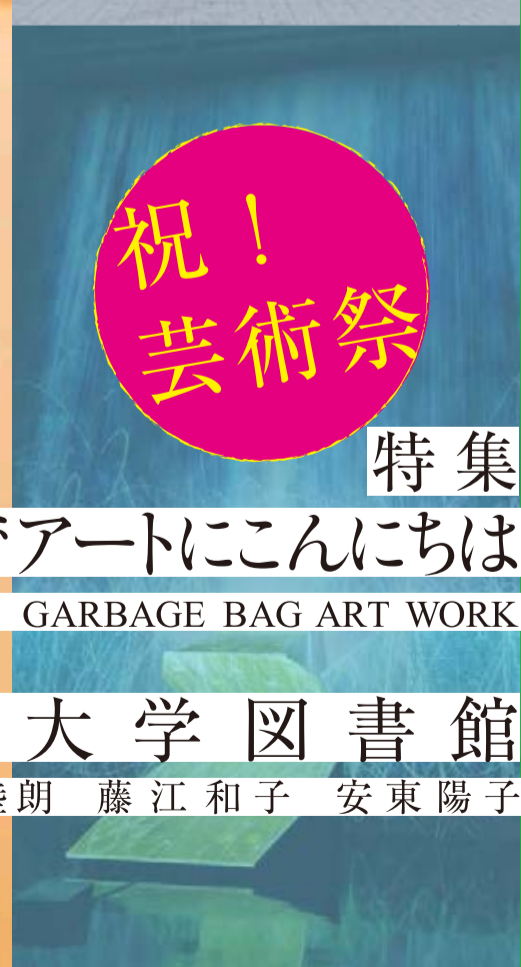
特集

こんなところでアートにこんにちは

おおいたトイレナーレ GARBAGE BAG ART WORK

多摩美術大学図書館

伊東豊雄 佐々木睦朗 藤江和子 安東陽子



## TAMABI REPORT



## 平野啓一郎 (小説家)

「彼氏に甘えている自分もいれば、  
バイト先で後輩に厳しくしている自分もいる」

7月19日、本学八王子キャンパスで、芥川賞作家の平野啓一郎さんを招いた特別講義が開かれた。テーマは「アイデンティティを巡って～『個人』から『分人』へ」。「私とは何か」という普遍的な問題について、「個人」は分割できるという、欧米近代の言葉や思想に頼らない新しい考え方を披露した。

人はそれぞれ「個人」というアイデンティティを持つことによって「私」を認識する。ではその「個人」はどこから来るのか。平野さんは、まず言葉の成り立ちを読み解くことから始めた。

「個人」を意味する英語“individual”という言葉は、もともとギリシア語の“atom”から来ているという。「切る」の意の“tom”に否定を表す接頭語“a”がついたのが“atom”。切り分けられないもの、つまり「分割の否定」を意味しているのだ。そのラテン語訳としてやはり「分けられない」という意味の“individuus”という語が作られた。近代以降の欧米を中心とした市民社会で発達した「個人」という概念は、人と違う自分を前提としている。少なくともそれ以上分割して考える必要がない点で、この言葉の成り立ちと合致する。

平野さんの話でさらに興味深かったのは、宗教とも深いかかわりがあるという指摘だ。キリスト教のような一神教は、一人の人間が複数の神を信じることを許さない。それゆえ、完全なる存在である全能の神と向き合う人間の分割できない。少なくとも欧米には、「個人」が分割できないものであるという考え方に導く様々な要件があったことに、聴講している学生たちは静かに聞き入っていた。

しかし、ここで平野さんはまったく新しい「個人」の捉

え方を唱えた。「個人」は分割できるのではないか、ということだ。今は終身雇用制が崩れ、一つの企業で個を貫くことが難しい時代。一方、ネットが普及して、遠隔地にいるような人と趣味などでつながりやすくなった時代でもある。勤務先で身を粉にして働く一方で、夜や休日は別の仲間と趣味に興じる。そこにはすでに二人の自分がいるのではないか。はたして、そのどちらが本当の自分なのか。「彼氏に甘えている自分もいれば、バイト先で後輩に厳しくしている自分もいる」――平野さんは学生たちに分かりやすい例を挙げながら、理路整然と自論を展開した。それが「分人」という考え方だ。

ところで、何人もの「自分」がいると、いいことはあるのだろうか。平野さんは、そこに現代を生き抜くヒントがあることに言及する。不況や社会構造の変化が生む不条理は時に様々な悲劇をもたらす。自殺などへとつながることがある。たとえば社会人が勤務先から解雇されたような場合、自分という人間を否定されたと感じる人もいるだろう。ここで個人が分割できなければ、もう生きられなくなっても不思議ではない。しかし、個人を分割でき、別の自分を頼ることができるなら、そこに新たに生きる道が見えてくるのである。

取材・文=大村良輔 撮影=鳥越雛子

私とは何か  
「個人」から「分人」へ  
平野啓一郎

講談社現代新書  
2172

「私とは何か「個人」から「分人」へ」(講談社現代新書)

(ひらの・けいいちろう) 小説家。1975年愛知県蒲郡市生まれ。北九州市で育つ。京都大学法学部卒業。99年同大学在学中に文芸誌『新潮』に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。以後数々の作品を発表し、各国で翻訳紹介されている。著書は『葬送』、『滴り落ちる時計たちの波紋』、『決壊』、『ドーン』、『かたちだけの愛』、『モノログ(エッセイ集)』、『ディアログ(対談集)』など。近著は、新書『私とは何か「個人」から「分人」へ』、長編小説『空白を満たしなさい』、作品集『透明な迷宮』、エッセイ&対談集『「生命力」の行方～変わりゆく世界と分人主義』。

## 西牟田靖 (ノンフィクションライター)

## 世界50カ国の「現場」を訪ね歩く

9月27日、本学八王子キャンパスで、「現場を知ることで見えてくること」をテーマにノンフィクションライターの西牟田靖さんによる特別講義があった。西牟田さんは国内各地はもとより、エチオピアやトルコなど世界50カ国以上を訪れて取材したという。その経験に基づいた、現場でしか得られないこと、取材の結果を文章で表現することについての講義は、現場に赴くことの大切さを改めて認識させられる機会となった。

「好奇心をかき立てられたことや身の周りで起きて気になった出来事を自分の胸にストンと落ちるところまで調べきる。これが仕事の原動力」と語る西牟田さん。出版した本は8冊。取材経験は世界50カ国に及び、現場を駆け回ってまともな上げたものばかりだという。

「対馬から韓国釜山のネオンサインが見えた」

「北方領土で日本の携帯電話が繋がった」

約1時間半の講義の中で、こうした体験に基づいたフィールドワーク論が展開した。

2005年に出した『僕が見た「大日本帝国」』は新聞の書評に多く取り上げられ、新たな人との出会いなどにもつながった思い出深い一冊だという。

戦前の日本がアジア各地に立てた鳥居を見て回った体験をつづったのが同書の内容。戦前の国家神道を象徴する側面を持つ鳥居は、中国の旧満州、サハリン、台湾などいろいろなところに残っていた。サイパン島ではキリスト教の墓地の中にあつた。日本語をしゃべるお年寄りが地域にいることもあった。取材を重ねると、戦前の日本の姿がリアリティーをもって浮かび上がってきたという。

ところが話はそれだけでは終わらなかった。ある読者から、こんな内容の手紙が来たそうだ。

「素晴らしい本をありがとうございました。A級戦犯

は無実だということを、東京裁判を否定する私たちの会でしゃべっていただけませんか」

西牟田さんの取材は、戦前の日本の広がりを客観的に確認するためだった。成果として出版した本が、軍国主義を肯定する立場のように誤読されていたのだ。「伝える」ことの大変さが改めて分かるできごとだった。

現場に赴くことの大切さを語る一方で、「現場はあまりにも説得力があるため、薬にも毒にもなる」と話す。事前の情報で攻撃的だと想像していた相手が、話してみるととてもいい人で、持っていたイメージが覆されてしまい、書き始めた原稿がなかなか文章の体をなさない状況に陥ったことがあったそうだ。現場を経験せずにはかからの情報だけで文章を書くことがいかに誤謬の危険を伴うかということにも想像が及ぶ話だった。

TENTを担いで50ccのバイクで日本中を回ったり、船や鉄道を乗り継いで中国の奥地に出かけたり。行動力は取材を基本にするノンフィクションライターの武器である。しかし、西牟田さんは「自分のしたいことが必ずしも仕事に結びつくと限らない」とも話し、生計を立てることの大変さに言及する。それは書く内容に妥協しないことの裏返しとも取れた。

取材・文=加藤千裕 撮影=河野から

日本から来た日本人  
西牟田靖

春秋社

「<日本国>から来た日本人」(春秋社)

(にしむた・やすし) 1970年生まれ。著書に『僕たちの深夜特急』(スパイク、97年)、『世界股られ紀行!』(ワニマガジン社、2001年)、『僕が見た「大日本帝国」』(情報センター出版局、05年)、『写真で読む 僕が見た「大日本帝国」』(情報センター出版局、06年)、『誰も国境を知らない』(情報センター出版局、08年)。

# Whoops! 用語事典

えんぴつ、愛、手仕事、美食、フォント、春画、宇宙…。本誌が取り上げるテーマは実に幅広い。それぞれのテーマを表す言葉の意味を、記者が足を使い、取材に出かけて調べてみた。そんな「用語事典」があってもいいですね。

用語No.3

制服  
せいふく

学校など、一定の集団や団体に属する人が着よう定められている服装。制服を「着せられていた」経験を持つ人は多いだろう。しかし、あんなに窮屈だった制服に、大人になりノスタルジーを感じることもあるのではないかな。そんな今なら、制服と仲直りができるかもしれない。ネバアランドの作る可愛い「制服」の背景には、大きな反骨精神があった。

## Neb aaran do by ネバアランド (ファッションブランド)

たくさんのリボンをあしらったネクタイ、丸衿やセーラー衿のワンピースやブラウス。洋服のデザインを担当する Eily さんと、写真や物語をディレクションする Jammy さんによるファッションブランド、Neb aaran do by ネバアランド (以下「ネバアランド」) は、「制服」をモチーフにしている。とはいえ、初めからそうだったわけではない。「漠然と作っていた洋服は、どれも小さい頃『女の子らしくしなさい』と言われたり、学校の規則で着せられたりしたようなものだった。本格的にブランドとして始めるにあたり、丸衿やセーラーは『着せられていること』への反発から出てきたのではと思い、整理したら制服にたどり着いたんです」と Eily さんは話す。そんな「制服」たちは今、かつての少年少女の心をつかむ不思議な魅力を持っている。

二人は多摩美術大学で油画を専攻していた。特に仲良くなったきっかけはドイツ語の授業。油絵よりもパ

フォーマンスでの表現を主とし、Eily K Jammy というユニットで芸術祭や講評会で発表。卒業制作も二人で提出した。当時は卒業制作を共同で出す前例はなく、他の学生と平等にするために二つ作品を作ったという。卒業制作展ではパフォーマンスの展示も禁止だったため、規格ぎりぎりの大きさの箱を作り、中で行われる二人のパフォーマンスを外から覗く立体作品として提出した。

だが、次第に限界を感じるようになる。「私たちの描いた世界に入りお客さんに楽しんでほしい気持ちはずっとあったんですが、そういう自分たちのやりたいことが、伝わってないのではと考えるようになった。そんな時、服を作って写真を撮り、物語とくっつけて、着ることでお客さんに物語の一員になってもらうネバアランドはそれを叶えてくれたんです」と二人は振り返る。

学生たちに向けて「周りにどう思われるかより、自分がしたいことを大事

にしてほしい。学生時代、展示に友達をたくさん呼び、盛り上がり過ぎて終了というのが嫌だったので、ほとんど誰にも言わなかった。みんなが『何これ』と言う中で立ち止まってくれる少しの人を大事にしたいと思ってやっていたら、結果的に友達も増えました」と話す Eily さんと、「私は今まで周りの目を気にしがちだったのですが、何を言われてもブースに立ち続ける Eily さんを見て『それでいいんだ』と思えたんです」と笑う Jammy さん。ただ可愛いだけじゃない「制服」の裏側に、強い思いを見ることができた。

取材・文=今井楓 撮影=韓松鈴



取材に応える Eily さん (右) と Jammy さん。西荻窪のアトリエにて

## 着ることで 物語の一員になる



年3回のコレクションをそれぞれ「学期」と呼び、2014年度2学期のテーマは「しずかに!今は彼らの時間みたい。」(Ruhe bitte! Es ist ihre Zeit.)。\*寝ている間に動き出す妖精\*をイメージしたアイテムが並び(写真提供= Neb aaran do by ネバアランド)

(ネバアランドウ パイ ネバアランド) ともに多摩美術大学に在学中の 2006 年に結成、衣装のデザイン・制作を行う Eily と、写真や映像をディレクションする Jammy の 2 人組。09年に本学を卒業後、Eily は文化服装学院へ進学・卒業。Jammy はウジトモコ氏に師事。当初は現代美術の作家として、オリジナルの衣装を用いたパフォーマンス・写真・映像作品を発表。その後、作品のための衣装づくりから洋服をメインとしたメゾンへ転換。12年、New York Market Week に参加、SOHO にて展示会出展、13年にはハヴ・JAPAN EXPO 出展。14年、ブラジル・サンパウロでの Tokyo Fashion Festa に参加。

# 倉敷本染手織研究所

用語No.4

工人  
こうじん



外村吉之介が考案した縦機で織った「倉敷ノッティング」縦に木綿糸を張り、ウールもしくは木綿の糸束を結びつけて作られる。



真剣なまなざしで織機を使い布地を織っていく。ピリッとした緊張感が肌を伝う

白壁の蔵屋敷や格子窓の町屋などの日本の伝統的な建物と、大原美術館に代表されるモダンな洋館が建ち並ぶ岡山県倉敷市美観地区。ここでは、ゆったりとした時間が揺るぎなく流れている。倉敷本染手織研究所は、街並みの中心にあり、ことさらに静穏なたたずまいをみせていた。民芸運動家であり染色家であった外村吉之介 (1898~1993 年) が 1953 年に設立した倉敷本染手織研究所は、今でも各地から研究生を迎え入れ、日々手織り、手紡ぎ、本染め (天然染料を用いた染め) の実習を行っている。

抽象的で大らかな模様と、厚くふっくらとした座り心地が特徴的な「倉敷ノッティング」という椅子敷きは、この研究所が制作している代表的な手工品だ。

「研究所が設立した頃からノッティングの模様はほとんど変わっていません。みんなが好きで安心して使える模様っていうのは決まっているんですね」

そう教えてくれたのは、同研究所主任の石上梨影子さん。毎日使用する身近なものだからこそ、野暮ったくない、生活の邪魔をしないものがいい。だからといって機能一点張りの物は、使っていて楽しくない。「潤いとしての装飾は大事」と石上さんは言う。

研究所の中では 9 人の研究生が真剣なまなざしで素材に向き合っていた。大きな櫛を使って羊毛を均すカーディングと呼ばれる作業をしている人、糸車で糸を紡ぐ人、そして織機を使って糸を布地へと織り上げる人。黙々とした作業の合間に、時折談笑が挟まれる。緊張感があるながらも、心地よい、とても穏やかな時間が過ぎる。

倉敷本染手織研究所は作家を育成するために設立されたのではない。目的は、日夜の暮らしの中で働く健康でいばらない美しさをそなえた民芸品を作る「工人」を育成すること。「自分の手で、自

手仕事を尊び、伝統を守り伝える職人。スピードが優先され、めまぐるしく生活環境が変わる現代においては、ともするとその価値が見失われることがある。そんな時代のさなか、手間暇かけて作った日用品に宿る「美」が、健やかでとても温かいものであるということを教えてくれる工人たちが遠く倉敷の地にいた。

分の家族のためにいい物を作って着せてやって欲しい」という外村の思いが背景にある。自らの手で大切な人のために物を作ることは、その人への愛情を自分の中で再確認することにつながる。「手作り」が当たり前だった時代の人々は、そうして家族への愛情を深めてきた。民芸品の本質とはきっとそういうものなのだろう。

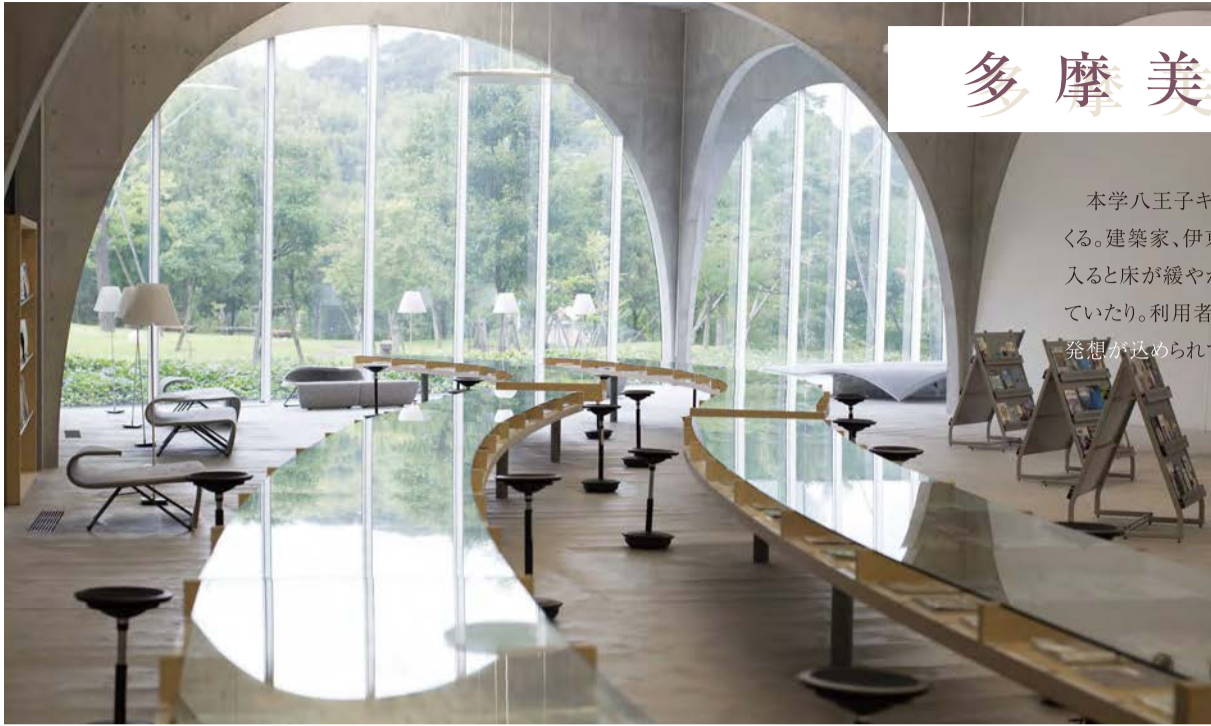
「家族のためにいい物、可愛い物を作りたいとなったら本当に手間暇惜しまない。特に、子どものためにはね。それがまた楽しい! 楽しくないとできない」。その日一番の笑顔を見せて、石上さんは物作りの極意をそう教えてくれた。

取材・文・撮影=菅原海人

(くらしきほんぞめておりけんきゅうじょ) 1953年に倉敷民藝館付属の工芸研究所として、外村吉之介が設立。入所資格は満 18 歳以上の健康な女子に限られる。4 月からの 1 年間を通して、倉敷ノッティングやショール、着尺など暮らしのためのあらゆる染織物を制作する授業が行われる。研究所の卒業生によって結成された会、倉敷本染手織会による展示が 2014 年 11 月 18~24 日の 7 日間、倉敷民藝館で開催される予定。



同研究所主任の石上梨影子さん。研究所に来る前は染色家の芦沢銜介さんのもとで型染めを学んでいたという。笑顔がとても素敵なお方



アーケードギャラリーを抜け、書架に入って左手にあるマグテーブルは、外に向かってゆるやかに傾斜している (\*1)

## 多摩美術大学図書館

本学八王子キャンパスの正門を入ると、左手に滑らかなアーチが連なった建物が見えてくる。建築家、伊東豊雄さんの代表作の一つとして知られる多摩美術大学図書館だ。中に入ると床が緩やかに傾斜していたり、うろこ模様のカーテンが柔らかな日差しを机上に映していたり。利用者は心地よく本に接することができる。この美しい図書館の建築にはどんな発想が込められているのか。開館に携わった専門家のもとを訪ね、教えてもらった。



メディアスペースでは様々な映像資料を視聴できる (\*1)

大きさやカーブが異なるたくさんのアーチを並べ重ねたような造りの多摩美術大学図書館。アーチの内側はそれぞれ窓になっており、建物は開放的な美しさをもたらしている。設計を手がけたのは日本を代表する建築家、伊東豊雄さんだ。

### 渦のようなものを作りたい

伊東さんは、昔から自然の水や波、森、風、空気の流れといった"流れているもの"に強い興味があったという。例えば、流れている川に杭を打つ。水は止めどなく周りを流れても、杭は動かない。多くの建築家は、その杭が建築だと考える。だが、伊東さんは「杭の後ろに流れている渦のようなものを作りたいとずっと思っていた」という。

その場所は、周りの水流と常に関係しながら渦巻いている。流れの速さが変われば、渦の形も変わる。ならば、環境によって表情や息遣いを変える建物があってもいいのでは、と発想は展開する。そして、「周りの環境との境界がはっきりしない建築を作りたい」という考えが図書館の設計に生きた。本学八王子キャンパスは、八王子市でも鍵水という緑あふれる場所にある。館内に入ると、まるで自然の中にいるような解放感を体験できる。心の自由を得た学生が活字や写真に触発されながら、様々なアイデアを生み出す場となっているのだ。

伊東さんは昨年、建築界のノーベル

賞と呼ばれるプリツカー賞を受賞した。仙台市のせんだいメディアテークなどとともに、本学図書館も伊東さんの革新的な建築の一つとして受賞理由の引き合いに出された。だが伊東さんは、日本の社会では建築家があまり重視されていないことを嘆く。2011年3月に東日本大震災が起きた後、復興を考えるために政府や自治体に呼ばれたのは土木コンサルタントのみで、建築家には声がかからなかったというのだ。だから伊東さんは自主的に被災地支援の一環として、集って安らぎを得られる共同スペース「みんなの家」を提唱し、これまでに11棟を仙台市や陸前高田市に建設した。中で過す人を第一義に考えたスペース。それが多摩美術大学図書館であり、「みんなの家」なのである。

だが「建築家が偉いわけじゃない」と伊東さんは笑う。外国に行くと「こんなに面倒なことはやってられない。お金さえもらえればいい」という職人ばかり。一方日本では「こんなに難しいのなら俺がやる」という大工や職人がまだ多い。本学図書館の驚くほどきれいに打ち付けられたコンクリートからも、日本の職人や大工の技術の高さがうかがえるだろう。

### 建築家とタッグを組む

アーチ型を重ねた特殊な構造を持つ本学図書館のような建築では、「構道家」の腕が大いに生きる。地形や自然災害



2階の芸術系の本が並ぶ書架。背が低いので、どこからでも館内を見渡すことができる (\*1)

など様々な条件を考慮して構造計算をし、安心で安全な建物にするのが構道家、佐々木睦朗さんの仕事だ。

佐々木さんは「こうしたらもっと面白い」と建築家に提案したり、ともに建築のコンセプトやデザインを考えたりもする。地震の耐性や安全面で安心できるばかりでなく、非常にエレガントで美しい本学図書館は、伊東さんとタッグを組んだ共同作業の成果。構道家は建築家を支える黒子ではなく、対等なパートナーである。

建築物の造形という点では、佐々木さんはスペインのサグラダ・ファミリアなどの作品で知られる建築家のアントニ・ガウディと同じスペイン出身の構道家のフェリックス・キャンデラに格別な"思い出"を持っている。学生の時、ガウディの表層的な部分にだけフォーカスを当てた映像を見る機会があった。奇怪な造形にすっかり参った佐々木さんは、ガウディが"嫌

い"になってしまう。

30年後、憧れの大先輩キャンデラと会う。建築家の斎藤裕さんが出すことになったキャンデラの本の中で、佐々木さんがキャンデラと対談をする機会を得たのだ。そこで佐々木さんは「ガウディに興味がないとは何事だ」と一喝される。そして対談が終わった足でバルセロナに飛んだ。

「奇天烈な造形にばかり目がいくが、ガウディが構造のことも深く考えているからこそ成り立っているのだとようやく思い至った」と語る佐々木さんは、今この二人を最も尊敬しているという。本学図書館の建築の根底に先達への思いがあることを知ると、それがただ斬新なだけのデザインなのではなく、歴史に裏打ちされていることに思いが及ぶ。

佐々木さんの仕事の中で極めて特殊な例の一つ紹介しておこう。1977年から



取材に応える伊東さん。小さい頃から野球をやっていたという。腕がたくましい (\*1)

### 伊東豊雄 (建築家)

(いとう・とよお) 1941年生まれ。主な作品に「せんだいメディアテーク」、「TOD'S 表参道ビル」、「座・高円寺」、「台湾大学社会科学部棟」など。現在、「台中国立歌劇院」などが進行中。日本建築学会賞作品賞、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会 (RIBA) ロイヤルゴールドメダル、プリツカー建築賞など受賞。



佐々木さんは日本に会員が4人しかいないという「ガウディ友の会」会長を務めている (\*2)

### 佐々木睦朗 (構道家)

(ささき・むつろう) 1946年愛知県生まれ。68年名古屋大学工学部建築学科卒業。70年同大学院工学研究科修士課程修了後、木村俊彦構造設計事務所勤務。80年佐々木睦朗構造計画研究所設立。建築家とコラボレーションしながら構造とデザインとを結びつけた数々の建築を実現してきた。主な作品に「山口情報芸術センター」「せんだいメディアテーク」「金沢21世紀美術館」「Dior 表参道」などがある。

計画が継続しているクリスト&ジャンヌ=クロードのプロジェクト「The Mastaba, a project for Abu Dhabi」。アブダビの砂漠に40万個ものドラム缶を積み上げてピラミッドのようなモニュメントを建てる計画だ。高さ150m、敷地は330×225mに及び、サッカーのピッチが4つも入ってしまう。最初にドラム缶を突起のある板のようなものの上に設置し、重機を使ってワイヤーロープで板を釣り上げ、ピラミッド型にする。危険な作業は全て地上で行うため、建設作業は1日で行える計画だ。こんなことから、建築を支える構造家の重要性がよく分かる。

### 水平ではない床を生かした家具

本学図書館のインテリアの多くは藤江和子さんの手によるもの。藤江さんは市販される家具ではなく、建築家の設計した空間のためのインテリアを手がけるデザイナーだ。

館内に足を踏み入ると、まず床が水平ではないことに気がつくだろう。DVDプレーヤーが置かれたメディアスペースの机は、脚の長さを変えることで天板が水平になるように据え付けられている。対して雑誌類の置かれるマグテーブルは、床に沿って傾斜している。美大では、雑誌を手にするときに一字一句漏らさず読むよりも、図版を見ることのほうが多い。傾斜に沿って歩きながらマグテーブル全体の雑誌を一望できたりと、学生が自然な動きの中で素早く情報を得られるテーブルなのである。時には視線が外に流れて鑑水の緑の中に気持ちがいく。利用者の目の動線まで考えたテーブルの設置は、既製品では難しいだろう。

こうした工夫は2階の書架にも見られる。一目見て分かるのは、美術書が置かれる書架の背が「低い」ことだ。蔵書を確実に収蔵するのは、図書館建設時の当たり前の条件だ。本学の場合、20年後には30万冊収蔵できるのが条件。背の高いごく普通の書架を作っていれば、この冊数を収蔵するのは簡単だった。だが、藤江さんはあえて背の低い書架を採用した。背の高い本棚が立ち並ぶのと、2~3段しかない棚が設置されるのでは、空間の感じ方は全く異なる。後者なら館内を一望でき、閉塞感がなくなる。さらに、伊東さんの設計した空間の、外に対する視線の広がり遮られずに生きる。

一段の棚にも独自の工夫がある。本



藤江さんの事務所にて。実際に使われた多摩美術大学図書館の模型を前に(\*3)



光が入って、アーチの空間と柄が呼応するようにできているカーテン。実はその光が当たる姿を見られる時間は、1日の中で意外と短い。たまたま居合わせると「ちよつといいもの見たな」という気持ちにさせてくれる(写真提供=伊東豊雄建築設計事務所)

がぎっしり詰まっていると、棚自体を壁のように感じてしまう場合がある。最も大きい本が入るように設計された図書館の棚をすべてに採用すれば、様々なサイズの本が収められることで自然と隙間が生まれる。この隙間が重要なのだ。隙間からチラリと見える向こう側の本。「あの本はなんだろう?」とふと思う。これが読者と書籍の意外な出会いになることがあるのだ。芸術系のテーマは何か一つのポイントを解明すれば理解できるわけでも、一つの答えがあるわけでもない。だから、何かが気になって手に取った本は自分の肥やしになるものだ。

ここの書架は、その出会いや発見のきっかけを増やす。出会いを大切に、いろいろなことに目を向けて感性を磨いてほしい——そんな思いが藤江さんの仕事には込められているのだ。

### 建物が体ならカーテンは洋服

空間にあわせてカーテンなどのテキスタイルをコーディネートしたり、一からデザインしたりする。それが安東陽子さんの仕事だ。

本学図書館のカーテンは伊東さんから「イキイキとした空間にしたいので素材感のあるものを」と伝えられ、安東さんがデザインした。閲覧テーブル全周にかかる鱗のような形が並んだ柄のカーテン。遠目には軽やかに見えるが、近くに寄ると意外と厚手なのがわかる。「カットジャガード」という技法によるものだ。パイル生地のように部分的に起毛した、フワフ

ワした素材感を持つ。柄の輪郭部分には薄手の素材が用いられており、透けた部分から光が射し込むと、カーテンの影が図書館の窓と呼応したアーチ型になる。建物の機能に合った厚みや色、織り方が選ばれたカーテンは、本を読む妨げにならないように遮光しつつも適度に柔らかい光を通す仕組みになっている。

「一日中事務所にいても、天気や時間によってカーテンの見え方は変わる。ずっと見ても飽きない」と語る安東さんは、いつもつい生地に目がいってしまうそうだ。例えば伊東さんとの仕事で台湾に行った時のこと。ホテルのカーテンがきちんとついているか、裾がどのようになっているかといったことに自然に目が行ったという。それも、ただ視覚的に生地を品定めするわけではない。例えば、クッションの手触りがよかったというように、五感を存分に働かせるのだ。建物が体だとすると、カーテンは洋服のようなもの。「肌触り」や「着心地」が大切なのである。

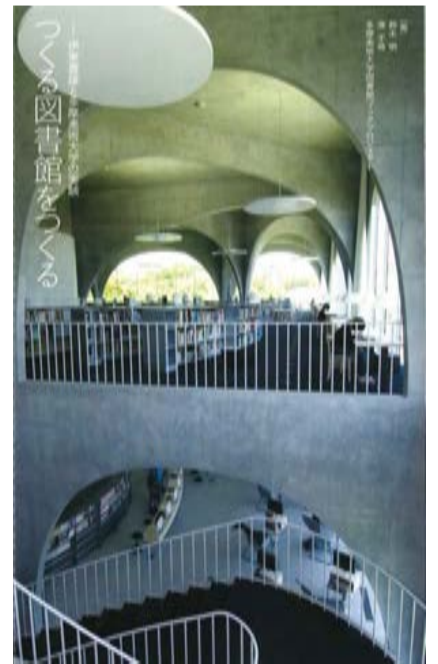
ある空間に人が入るとどんな刺激を受けるか。そもそもどんな感性を持つ人々がそこを訪れるのか。建物の役割とともにそんなことを考えながらテクスチャーのありようを探る。光と上手につき合っている本学図書館のカーテンを見ると、そうしたことに腐心した安東さんの考え方がよく分かる。「自分の頭だけで考えるのではだめなんです」と安東さんは言う。建物の躯体が立ち上がり、光がどのように入ってくるか、窓とカーテンと人がどのような関係になるのかが分かる状態になったと

きに、ようやく仕事が始まるのだ。

「関わった人みんなが“自分がつくった”と言える現場をつくる」

伊東さんの言葉である。一方で、この特集に登場した伊東さんを含む4人は、本学図書館のことを語る際に「自分だけでつくったものではない」と口を揃える。いわば、様々な分野のプロフェッショナルが結集して、この美しい図書館を作ったのだ。多摩美術大学の学生は何と恵まれているのだろうと思う。

取材 = 韓松鈴、林勇太、秀島朱美 文 = 韓松鈴  
撮影 = 荻原楽太郎(\*1)、今井楓(\*2)、河野から(\*3)、秀島朱美(\*4)  
レイアウト = 中村愛



本学図書館ができるまでが記された本。「スーパー職人」の紹介ページは必見

### 藤江和子(インテリア・家具デザイナー)

(ふじえ・かずこ) 富山県生まれ。1977年フジエアトリエ主宰。87年株式会社藤江和子アトリエ設立。現在、多摩美術大学客員教授。東京大学、広島工業大学、長岡造形大学非常勤講師。主な作品に「リアスアーク美術館」「茅野市民館」「多摩美術大学図書館」「真壁伝承館」「台湾大学社会科学部棟図書館」等。



普段から生地に目がいく安東さん。スカーフだけでも100枚以上持っているそう(\*4)

### 安東陽子(テキスタイルコーディネーター・デザイナー)

(あんどう・ようこ) 1968年東京生まれ。武蔵野美術大学短期大学部グラフィックデザイン科卒業後、株式会社布(NUNO)に入社、クリエイティブスタッフとして勤務。2011年に独立し、安東陽子デザインを設立。テキスタイルコーディネーター・デザイナーとして、伊東豊雄、山本理顕、青木淳、シーラカンズアンドソシエツ、平田晃久など多くの建築家の空間にテキスタイルを提供している。

## 特集

こんなところで  
アートにこんにちは

トイレにゴミ置き場。普通は長居を避けたり目をそむけたりしてしまいがちな場所だ。そこからアートが「こんにちは」と顔を出してきたらどうだろう。ちょっと楽しくなるのではないだろうか。そんなことに真面目に取り組んだ芸術祭が、大分市の「おおいたトイレナーレ」。一方、クリエイティブディレクターの山阪佳彦さんは「GARBAGE BAG ART WORK」という活動を展開している。いったいどんなアートが登場するのだろうか。取材に出かけた。

おんせん県大分の県庁所在地大分市が着々と準備を進めている芸術祭がある。その名も『おおいたトイレナーレ』。2015年夏に大分市の中心市街地で開催予定のこの芸術祭、なんと主役は「トイレ」だという。光の軌跡の作品で知られる2人組のトーチカや、家庭に眠るおもちゃを集めたインスタレーションで知られる藤浩志さんらによる四つの作品が、先行してすでに公開されている。

大分のトイレは座る人の  
悩みを解決する

美術家の川崎泰史さんが作ったのは、『北風と太陽』と題した作品。同市中央町のwazawazaビル2階のトイレに入ると、洗面台のそばに漫画から抜け出てきたような顔の彫刻が、人の背丈ほどの台の上に設置されていた。三つの黒い顔が合体した人間の頭が、口から風か何かを吐き出したり、脳みそらしき塊を天井に向かって噴出したりしている。頭の中が悩みでいっぱいになり、ついには噴き出してしまったのだろうか。一方、洗面台の上には、円錐状のうんちらしきものの上に座って考える仕草をしている少女の彫刻も。ひょっとすると「うんちく」の上に座っているのではないかと疑念が湧く。川崎さんは、トイレに座るときに誰もがロダンの彫刻『考える人』のようなポーズをすることを連想。逆手に取って「悩みを解決してあげられる空間を作りたい」とこの作品を制作したという。

普通は美術館などに展示するアート作品を、トイレという隠微な場所で見せるとどうなるのか。トイレゆえに生まれる独特のアートも出てくるだろうし、アートがトイレを例えば極楽的な

空間に変容させる可能性も大いにあるだろう。それは地域外から人を呼ぶ力にもなるだろうし、市民にも刺激を与える。

大分市では現在、駅ビルや県立美術館の建設など100年に一度ともいわれる街の大改造が進行中だ。お隣の別府市をはじめ、アートによる街の活性化が盛んになっているなか、絞って出た知恵がこの『トイレナーレ』だった。人間には必ず必要なトイレと、本当は必要なのになくてもすまされるような存在と思われがちなアート。いわば対極にあるものを結びつけたわけだ。

おおいたトイレナーレ実行委員会副委員長の菅章さんは、「町の人たちには好評。トイレの提供を募ったら、30以上の提供者が集まった」と話す。トイレというテーマだからこそ、誰もが年齢問わず身近に感じるのだろう。

「アートを触媒にして石ころが宝石に代わっていくような体験をできる街づくりをしたい」

菅さんの言葉は実に力強い。

街を美しくするゴミ置き場  
インスタレーション

「これはゴミ置き場?」

思わず目を疑ってしまうような空間が広がっていた。たくさん積み上がったゴミ袋のすべてに、青くてポップな魚のモチーフが描かれている。ふだんは目をそむけている場所に、目が釘付けになる。ゴミのすべては、クリエイティブディレクターの山阪佳彦さんがプロデュースしたゴミ袋で出されていたのだ。アート作品のようにさえ見える。「ゴミ置き場インスタレーション」とでも呼ぶべきだろうか。

きっかけは、あまりに汚いゴミ置き

場を見た山阪さんが、「見た目だけでも美しくできないだろうか」と考えたことにあった。ゴミは必ずゴミ袋に入れて捨てられる。ならば、ゴミ袋のデザインを工夫すれば、美しいゴミ置き場はできる。そんな思考が頭をめぐる。

ある日山阪さんは、ひとつのゴミ置き場に目を留めた。ゴミ袋が規則正しく積み上げられ、石垣のようになっていたのだ。山阪さんはこんな発想をした。

「一人の美意識に訴えかけるだけではなく、住人のみんながゴミ置き場をきれいにしようという意識を持ちたくなるようなゴミ袋をデザインできないか」

単純な水玉やストライプでは力が足りないと感じた。「見た瞬間に気持ち動くことが大事」と山阪さんは話す。そして、『GARBAGE BAG ART WORK』の第一弾となる『ゴミ置き場をアートにするプロジェクト』を始めた。

もはやゴミ置き場はキャンパスのようなものだった。ゴミ袋のデザインによって森林になったり花畑になったり。積み上げることで、一つの風景が生まれるのだ。海洋をイメージしたゴミ袋

いると、まるで魚を投網でつかまえているかのようなのである。

山阪さんは、『ゴミは楽しく持って帰ろうプロジェクト』を展開する。ゴミ袋を「持って帰らなければならない」という義務ではなく、「持って帰りたい」という気持ちにさせるようなデザインを工夫した。袋には赤い目玉が描かれている。把手を結ぶと長い耳が出て、ウサギになるのだ。子どもたちに「ウサギさんを家に連れて帰ってあげようね」と言えば、喜んで持って帰る。このプロジェクトから生まれた『Love-it! 君(ラビット君)』は、2008年の「キッズデザイン賞」に選ばれた。「ラビットくんを持って遠足の帰りに歩いている子どもたちを見たときには、とても嬉しかった」と話す。

朝の時間帯、ゴミ収集車が来る前のゴミ置き場が美しいアートに変容すれば、通勤に道行く人たちの表情もふっと緩み、日本が明るくなる。そんなことまで考えるのは大げさだろうか。

取材=清水千里、秀島朱美  
文=秀島朱美(おおいたトイレナーレ)、  
清水千里(GARBAGE BAG ART WORK)  
レイアウト=古澤旅人

## 『おおいたトイレナーレ2015』

2015年夏、大分市の中心街で開催予定。「トイレナーレ」は「トイレ」と3年に1度開催の芸術祭を意味する「トリエンナーレ」を組み合わせた造語。先行して4作品が公開されている。  
<http://www.toilennale.jp/>



↑川崎泰史『北風と太陽～考えたってしょうがないじゃん～』  
作品名はソップ童話に由来するというが、その真意は…?  
photo: yasunori takeuchi

←SUIKO『色、カタチ、生命 /letter～酔狂～』  
喫茶店「the bridge」(大分市中央町3丁目)のトイレ  
を万華鏡のような空間にしてみた  
photo: yasunori takeuchi



『ゴミは楽しく持って帰ろうプロジェクト』より、  
『Love-it! 君』ゴミ袋



『ゴミ袋だって地産地消プロジェクト』より、『サン  
スター × 高槻市 × GARBAGE BAG ART  
WORK』のゴミ袋。菌磨き工場での端材のリ  
サイクル品



『ゴミ置き場をアートにするプロジェクト』より、海洋をイメージしたゴミ袋

## 『GARBAGE BAG ART WORK』

ゴミ袋などを利用してゴミ置き場をアートにするプロジェクト。クリエイティブディレクターの山阪佳彦さんの主導で、2006年にスタートした。ゴミとの向き合い方を問い直す試み。  
<http://www.gba-project.com>

# Whoops! 見聞録

うーぶす・けんぶんろく

## 【『仮面ライダー』の背景】

かめんらいだーのはいけい



『仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー THE MOVIE 超・電王トリロジー』に登場する電車「デンライナー」のセット内



「デンライナー」を揺らすための仕込みバネ



東映東京撮影所にて

美術監督

### 大嶋修一

(おしま・しゅういち) 東映東京撮影所美術部に所属。1985年『ビー・バップ・ハイスクール』にて美術監督デビュー。2000年に『仮面ライダークウガ』の3、4話を手掛け、翌年の『仮面ライダーアギト』から本格的に「仮面ライダー」シリーズに関わる。

## 特撮のリアリティーを支える“美術造形家”

大嶋修一さんは「仮面ライダー」シリーズの『仮面ライダークウガ』や『仮面ライダーアギト』をはじめとする多くのテレビドラマや映画に、美術監督として関わってきた。セットの制作を手掛けているその職種は、「美術造形家」とも呼ばれるべきものだ。

大嶋さんの作るセットはリアルで細かく、一切の妥協がない。場の雰囲気や風景、セットで作っているもの自体の動きなどを、実物さながらに表現している。2007年放送の『仮面ライダー電王』では主人公たちが「デンライナー」という電車に乗っており、俳優たちはそのセットの中で演技をした。電車の中であることを表現するためにセットの下にバネを仕込み、撮影の時には実際にセットを揺らし、本当に走っている電車の中であるかのように見せる。電車が大きく揺れるシーンになったらセットを大きく揺らし、変化のある揺れや動きを視聴者に伝えている。

ある建物を映像作品で表現する場合、外観と室内は違う場所で撮影するのが普通である。外観を撮影するときには実際に存在する建物を使い、室内はセットで作るのだ。そうした場合に、大嶋さんは入口のドア一つにまでこだわりを見せる。背景にすぎないからと遠目に見てそれらしいもので済ませるのではなく、実際の建物にあるのと全く同じものをセットの中に作り込む。だからこそ、本当にその建物の中で俳優たちが演技をしているかのように見えるのである。

映画という虚構の世界を、いかに本物のように見せるか。大嶋さんのような美術監督は、俳優たちが迫真の演技するにふさわしい空間の構築をしている。いわば、俳優たちを生かす仕事ともいえる。大嶋さんたちは、プロデューサーや監督から伝えられたイメージを受け、どうやって再現するかに知恵を絞り、実現に邁進する。こんな話もしてくれた。

「仮面ライダーの世界は、日常と非日常があるからこそ面白い」

特撮作品特有の秘密基地のような場所がある一方で、主人公たちが住む日常的な場所もある。現実と非現実の両方の再現を追求してこそ、仮面ライダーの世界は視聴者の目に生々しく届くのである。

取材・文=中村昂史 撮影=大村良輔

## 【どくろ興業】

どくろこうぎょう



「どくろ興業」のスタジオにて。「今後はアートの分野を越え、あらゆる手法の表現者たちと共に活動したい」と岡田さんは語る

どくろ興業代表、精神科医

### 岡田聡

(おかだ・さとし) 精神科医。1958年富山県生まれ。2012年に「どくろ興業」を設立。

## 作品は作家との友情の痕跡

繊維関係の間屋が集まる東京の馬喰町に、精神科医の岡田聡さんが代表を務める「どくろ興業」のスタジオはある。岡田さんは、自身のコレクションを展示する展覧会「空想美術館シリーズ」をトーキョーワンダーサイトで10回にわたり開催した収集家だ。ジュリアン・シュナーベルの作品をはじめ、コレクションの数は500以上に及ぶという。

岡田さんは小学生の頃、画家になるのを夢見ていたが医学の道に進む。精神科医になった頃から、美術家を応援する責任を感じるようになったという。画家を志していたからこそ、岡田さんにはアートの道に進む厳しさが理解できた。支援のために作品収集を始めた。1980年代の半ば頃のことである。

驚いたことに「作品集めに興味はない」という。岡田さんにとって、作品は作家との友情の痕跡であり、自身の心の動きや思考の記録なのである。だから、作家との関係を何よりも大切にしている。「大げさに言えば、作家と共闘しているという感覚が収集の第一のモチベーションです」と語る。

2005年には、作家の活動の場として「MAGIC ROOM ???」を東京の清澄白河のアートコンプレックスにオープンした。この名称にも岡田さんの深い思いが込められている。近代社会では、魔術的なものは疎外されてきた。そこに現代の困難

を乗り切る可能性を見いだそうと“Magic”という言葉を使ったというのだ。だが、岡田さんのアート観に大きな影響を与える出来事が起こる。2011年3月11日の東日本大震災である。まったく来ることを予想していなかったこの災害に、岡田さんは「絶対的他人の訪れ」を経験した。

「自由」について深く考えるようになったのは、これ以降だ。「自由とは勝手きままに行動することや、己の小さな物語や感情を表出することではない。自由とは、絶対的他人からの問いかけに対して答える態度そのものである」「現在を生きる今日のアーティストは、自由の意味やその状況を間接的に教える伝道師のような存在であらねばならない」との見解を、岡田さんは自分のウェブサイトで表明している。この考えに賛同する表現者の活動を支えるため、2012年2～3月に『栗原良彰のFantastic Eccentric Show with どくろオールスターズ』と題した展覧会を、東京都千代田区のアーツ千代田3331で開いた。

一般に、アートを評価するときには、技巧、造形、市場価値を重視しがちだ。それよりも作家との心のつながりを大切にするのは、岡田さんが常に人の心=精神と向き合う精神科医であることとも無縁ではないだろう。

取材・文・撮影=足田健一郎 レイアウト=古澤旅人

# あっ!の人たち

「あっ!」とは驚いたときにあげる言葉。記事を読んで「あっ、あの人か」と、記憶の中からふっと存在が浮かび上がってきた、という方も多いだろう。今回登場するのは、ウルトラテクノロジスト集団のチームラボ、東京ディズニーリゾートで同性結婚式を挙げた東小雪さん、スーパー編集者の都築響一さん、そして勘定奉行のCMでお馴染みの歌舞伎役者、中村京蔵さん。あっ!の人たちに会いに行きました。



東京都現代美術館で展示された『憑依する滝、人工衛星の重力』(2014年、デジタルインスタレーション、『ミッション[宇宙×芸術]-コスモロジーを超えて』展より、2014年6月7日～8月31日) (\*1)

芸術作品は一人で作るほうが本当がいい物ができるのか?

## チームラボ

この夏、東京・清澄白河の東京都現代美術館を訪れた人は、巨大なアトリウムで行っていた全長19mのプロジェクトマッピングの作品に出合ったことを覚えているだろう。『ミッション[宇宙×芸術]-コスモロジーを超えて』展(6月7日～8月31日)で披露されたその作品のタイトルは『憑依する滝、人工衛星の重力』。日本のステイブ・ジョブズとも呼ばれる猪子寿之さんが率いる「チームラボ」の作品だ。

迫力ある滝の映像をプロジェクトマッピングの技法で映し出す。光の線で表現された水が、滝つぼではなく実物大の人工衛星の模型の上に降り注いでいた。どういうことなのだろうか。

水が滝つぼに落ちるのは、地球に重力があるからだ。重力を持つのは地球など質量がある物体だ。宇宙を飛んでいる人工衛星にも質量はある。ならば、仮に宇宙空間で人工衛星の近くに水源があったとしたら、その重力に引かれて滝が生まれることはありうる。そんな様子をコンピューターでシミュレーションし、人工衛星の模型を置いた空間に映像で水を降らせる。人工衛星に降り注いだ水が美しい軌跡を描いて跳ね返って蒸発するところまで表現している。しかも、鑑賞者は

水しぶきならぬ光のしぶきを浴びるようなリアルな体験をする。どんな発想をしようとした作品が生まれてくるのか、と思う。

猪子さんは、チームで働くことの重要性を説く。近代の芸術の世界は、例えばピカソを最も偉大な芸術家の一人に数えるように、個性の発露に重きを置いてきた。しかし猪子さんはそれを現代という時代の中でとらえ直して、「芸術作品は一人で作るほうが本当によい物ができるのだろうか」と疑問を呈する。『憑依する滝、人工衛星の重力』には、チームラボに所属するたくさんのスペシャリストの力が結実している。数学者が水の跳ね返りの軌跡を計算し、プログラマーがコンピューターに最良のプログラムを組み込む。アートディレクターは鑑賞者にいかに分かりやすくそれを見せるかに腐心し、CGアニメーターがプロジェクトマッピングにおける表現の美しさを追求する。チームでのものづくりによって、一人では決してできない芸術作品が生まれるのだ。

取材=荒井洋平、小林真弓 文=荒井洋平  
撮影=荒井洋平(\*2)、小川教生(\*1)



(チームラボ) プログラマー・エンジニア、数学者、建築家、CGアニメーター、Webデザイナー、グラフィックデザイナー、絵師、編集者など、情報社会のさまざまなものづくりのスペシャリスト、構成されているウルトラテクノロジスト集団。サイエンス、テクノロジー、アート、デザインの境界線を曖昧にしながら、WEB、インスタレーション、ビデオアート、ロボットなどメディアを超えて活動中。2001年に猪子寿之氏が創業した。



チームラボの社内風景。右下が代表の猪子寿之さん(\*2)



東京の都心のとあるビルの3階。室内には壁一面に本が並んでいた。ここは、編集者、写真家として活躍する都築響一さんの自宅である。

都築さんは、地方の珍風景やスナック、郷愁に満ちた秘宝館などを、「怒りと焦り」を原動力に取材し続けてきた。「みんな好きはずなのに、誰も語ろうとしない」という怒り。「誰も記録してないけれど、今やらなければなくなってしまう」という焦りだ。

その編集人生の原点ともいえる『TOKYO STYLE』(1993年)では、東京の安アパートで狭いながらも楽しく暮らす若者の部屋を通して、持ち家か賃貸かというのは住む人の優劣ではなく、同列の選択肢にすぎないことを示した。

取材は美術の分野にも及ぶ。全102巻の現代美術全集『アート・ランダム』を刊行したのは89~92年。今、都築さんの目に美術はどう映っているのか。「歪んだ世界になっている」という一言にはっとさせられた。

「プロの仕事は素人に劣等感を植え付けること。それでプロは儲かる。そういう図式を壊したい」という。一方で、「多くの人が好む相田みつをの作品を専門家は馬鹿にする。批評すらせず完全無視。馬鹿にするのはいいが、世の中の大多数の人が好きなものの何がよくないのか、きちんと説得できないとプロとして失格だ」と都築さんは言う。「100年ほど前までは、ダ・ヴィンチの『モ

## 怒りと焦りが活動の原動力

# 都築響一 (編集者、写真家)



『珍日本紀行 東日本編』に収録した伊豆ろう人形美術館のページから。「最後の晩餐」の写真の横には、タイソンと耳の写真が。下に写っているのは『ROADSIDE BOOKS』の目次(\*1)



都築さんの著書群(\*1)

ナ・リザ』など素人とプロの好きなものは同じだった。ところが、いつ頃からか乖離してしまった。今はそういう不幸な時代。わずかでもバランスをとってあげたい」と活動の動機を話す。

以前、対談をした美術家の杉本博司さんは「アートだから高いのではなく高いからアートなんだ」と言ったそうだ。伊豆ろう人形美術館で同じ対象を撮影しているのに都築さんの本は2000円ほど、杉本さんの写真作品は数千万円以上。だが、被写体を作ったろう人形師には一銭も入らない。多くのそんな疑問を投げかける。

教育にも問題点があるという。アート

でプロを目指すならまず美大に入るべきと考えられているが、「おかしいよ、そんなの」「入学してもやりたいことができずに違和感を覚えている学生がいたら、自分が正しいと思ってほしい。やりたいことを実現できる場所に身を置くこと。それは大学じゃなくたっていい」という。

編集者の立場から眼差しを注ぎ、一貫して身近な「今」を伝えている。都築さんが示す多くの選択肢は、建前でなく本音でものを見ているか、作っているか、と強く問いかけてくる。

取材・文=地引朋子  
撮影=荻原楽太郎(\*2) 地引朋子(\*1)



(\*2)

(つづき・きょういち) 編集者、写真家。1956年東京都生まれ。現代美術、建築、写真、デザインなどの分野での執筆、編集。76~86年、『ポパイ』『ブルータス』誌の編集に携わる。96年刊行の『ROADSIDE JAPAN』で第23回木村伊兵衛写真賞を受賞した。近著に『東京右半分』『独居老人スタイル』『ROADSIDE BOOKS』がある。毎週水曜日に有料メールマガジン『ROADSIDERS' weekly』を配信中(<http://www.roadsiders.com/>)。

## ジェンダーフリーの視点でみる芸術の魅力

# 東小雪 (LGBT活動家、文筆家、元宝塚女優)

「ひろこさんは、かけがえのないパートナーであり大切な家族。私たちは家族になる努力をし続けているんです」

そう笑顔で話すのは、2013年3月に東京ディズニーリゾートで同性挙式を行った元宝塚女優で文筆家でもある東小雪さんだ。彼女の結婚相手の増原裕子さんは、LGBTの支援活動を行っている女性である。



LGBTとはなにか。分からない人も多いただろう。LGBTとは、女性同性愛者、男性同性愛者、両性愛者、そして自身の認識している性と身体的な性別が同一ではない人々のことを意味する。

彼女自身が同性愛者であることに気付いたのは高校生の頃だったという。しかし、当時は周囲に打ち明けることができず、悩んでいた。そんな中、図書室に通い、男性同性愛者が著者の本を多く読んだという。中でも、石川大我著『ゲイのボクから伝えたい「好き」の?がわかる本』には大変励まされたという。

幼い頃、母親に勧められてクラシックバレエを始めたことがきっかけとなり、舞台に興味を持つようになったという。高校を卒業し、宝塚音楽学校に入学したときは、まだそこがどんな社会だったか、よく分からずにいた。だが、今考えると、宝塚音楽学校時代、そして宝塚歌劇団に入団した後も、男役と女役にはっきり分かれた配役がなされていて、女性ばかりだからと言って決してLGBTに寛容なわけではなかった。「む

しろ今の一般社会を再生産しているような構造は面白い」と語る。

宝塚歌劇団入団後、約1年半で惜しまれながらの引退となったが、引退後は自身が同性愛者であることをカミングアウト(公言)するかどうかでとても悩んだという。

そんな時、彼女の力になったのが芸術や美術という存在だった。最初はどのようにアートを見ればよいのか分からずにいたが、東京に移り住んでから実際にいい作品を目にする機会が多くなった。レズビアン写真家のザネレ・ムホリの作品を見た際には、差別意識について考えさせられたこともあり、草間彌生の作品に触れたときにはアートの力はすごいと感じたそうだ。「自分では絵を描きはしないけれど、アートに影響を受けながら執筆活動などで自分の考えをアウトプットしている」と目を輝かせながら答えてくれた。

自分らしさを大事にしたいと考えてのカミングアウト後に一番変化したのは自分自身だという。最後に、LGBTで悩んでいる人々へメッセージを頂いた。

「カミングアウトするかどうかは、ゆっくり自分と向き合って考えてください。でも怖がらずに、自分らしく生きていくためのよりよい手段を選んでほしいと思います」

取材=荒井洋平、小林真弓 文=小林真弓



2013年3月に行われた東さん(左)とパートナーである裕子さんの結婚式で撮影された写真

(ひがし・こゆき) LGBT活動家、舞台俳優、文筆家。1985年石川県生まれ。2006年宝塚歌劇団退団。10年LGBT支援活動を開始。著書に『なかつたことにしたくない——実父から性虐待を受けた私の告白』(講談社)など。

## あっ!の人たち!

型は歌舞伎役者にとって永遠のテーマ

## 中村京蔵(歌舞伎役者)



場所は、おそらく日本の企業の役員会議室。会議中にプロジェクターに映し出された映像の中から、歌舞伎役者が飛び出してきた。そして見得を切りながら一言、「勘定奉行におまかせあれい!」。会計ソフトのCMである。

歌舞伎は、日本人なら誰がこうした役者の姿を見てもそれと分かる伝統芸能だ。一方、「歌舞伎とは何か」と問われて、すらすら答えられる若者はいったいどれくらいいるのだろうか。身近なようで距離のある歌舞伎について、このCMで見得を切る役を演じた歌舞伎役者の中村京蔵さんから、このほど様々な話を聞くことができた。

京蔵さんは物心ついたときから、祖母に連れられてよく歌舞伎を見に行っていた。6歳の時にはすでに歌舞伎の世界に憧れていたようだ。しかし父親の反対などで、なかなか歌舞伎役者への道を歩めなかった。その後もあきらめきれず、大学を卒業したのち、国立劇場歌舞伎俳優養成所に入り、歌舞伎界の門を叩いた。

「ほかの芝居とは違い、歌舞伎には様々な様式があり、さらにそれを演ずるための無数の型がある。それを、子役のときから徹底的に体に叩き込む。その後、その型を極め抜いて、一度型を忘れて、さらにその型の先へ行くのです」

型の存在は、ミュージカルや普通の芝居と歌舞伎が決定的に違う点だ。舞台

で、ある決めめの台詞をしゃべるときに、手足をどう動かして見得を切るか。大きさに見えるようで、歌舞伎役者たちは流れるように身をこなしている。それは、何千回も型の稽古を重ね、咀嚼した成果なのである。「型は歌舞伎役者にとって永遠のテーマ」と京蔵さんは言う。

海外公演で特に珍しがられるのは、女形の存在。京蔵さんはこんな話を聞かせてくれた。

「海外のレクチャー公演で、笑うときに口元を着物の袖で隠す演技をしてみた。その時、アメリカ人の女性から『どうして大きな口を開けて笑ってはいけないのか』と質問がありました。歌舞伎では女性は口元を隠して笑うものだと説明したけれど、納得してはもらえなかった。同じ女性が次の日に、大きな口を開けて笑う女性の写真を持ってきたんです(笑)」

どうやら海外の女性にとっては、日本の女性のような「恥じらい」の感覚は理解しがたいらしい。だが、日本にもこの話にはっとする人は多いのではないか。こう見てはどうか。ふだんは見過ごしてしまうようなちょっとしたしぐさでも、動きが誇張化された歌舞伎はその本質をあらわにする。そんなことを確かめに、歌舞伎座に足を運ぶのもまた乙な鑑賞法である。

取材=加藤千裕、萬代とし栄 文=萬代とし栄  
撮影=萩原楽太郎(\*)



『瀧夜叉姫』より



『壽三升景清』より



『勘定奉行』に扮した京蔵さん



(\*)

(なかむら・きょうぞう) 歌舞伎俳優。1980年に国立劇場歌舞伎俳優養成所第6期研修を修了した後、4代目中村雀右衛門に入門、中村京蔵を名乗る。94年名題昇進。99年歌舞伎座賞。2005年伝統歌舞伎保存会会員に認定。02年、08年、13年国立劇場奨励賞。07年日本俳優協会賞、文化庁芸術祭舞踊部門新人賞。千葉大学、多摩美術大学、日本大学で非常勤講師。国立劇場歌舞伎俳優養成所講師。海外歌舞伎レクチャー公演の出演も多数(19か国41都市)。株式会社オービックビジネスコンサルタント会計ソフト『勘定奉行』CMに出演中。

# zoom up



「在り処」(=部分、2013年、194×130cm、アクリル、キャンバス)

## 「御神木」はいったいどこにあるのか

畑山太志(画家)

今年3月に「第1回CAF賞」(現代芸術振興財団主催)で、優秀賞と名和晃平賞を受賞した畑山太志さん。受賞作『在り処』は、神社や山にある「御神木」をテーマにした作品だ。高さ約2m、横幅1.3mのキャンバスは一見真っ白。だが、目を凝らすと画面いっぱいに、白い線が緻密に、そしてうねるように描き込まれている。下の層には黒い何かはわずかに顔をのぞかせ、底知れぬ生命力が渦巻いているのを感じる。しかし疑問が湧いた。肝心の御神木の姿を見つけることができないのだ。一体、どうしたことだろうか。畑山さんに尋ねた。

「日本の自然に宿る神々や霊性に関する研究をした民俗学者の柳田國男や生物学者の南方熊楠に惹かれたのがきっかけです」

こうした研究に触れたのは、本学2年次に履修した芸術学科の安藤礼二准教授の「民俗芸術論」という授業。もともと草花や自然が好きだった畑山さんは、次第に彼らの世界観への興味を深めていった。

授業で学んだ世界を実際に体験できればと、京都や奈良、さらに和歌山の熊野を訪ねた。日本の神々にゆかりの深い場所ばかりだ。「急に空気が変わる瞬間に触れた」と感じるのが何度もあった。古い神社や自然豊かな山に入ると心が洗われ、何かに温かく包まれるかのように感じた。本当に神々や精霊がその場にいるかどうかは、もちろんわからない。だが、自身の中にそ

うした感覚が生まれたのは確かだ。そこに興味が湧いた。「この不思議な感覚を描きたい」。その思いが、『在り処』の制作につながった。御神木そのものではなく、周りに潜む空気や存在感をとらえようとして結実した作品だった。

「空気」や「存在感」は、もちろん目で見ることができない。だが、「目で見える世界の中にも、実は見えていないものが数多く存在している」と畑山さん。例えば空気中のほこりは普通見えないが、常に存在している。畑山さんはさらにこう考えていた。

「いつも見ている木も家もテーブルもペンも、本当に見たと言えるのだろうか」と疑問に感じています。見たつもりになっている、ただ眺めただけになってしまっている。見過ごされているものは多くあると思うのです」

畑山さんの興味は、日常のなにげない世界にもおよんでいた。そのような日々の生活の中で意識が向けられない物たちのことを、畑山さんは「透間(すきま)に潜む、彼ら」という言葉で表現する。今後は、その「彼ら」を取り出して、絵画にしたいという。

見ることは何か、見えないものはどうすればとらえられるのか。畑山さんの作品はそんなことを考えさせてくれる。

取材・文撮影=林勇太  
レイアウト=宮坂咲紀



(はたやま・たいし) 画家。1992年神奈川県生まれ。多摩美術大学絵画学科油画専攻4年。2014年「第1回CAF賞」で優秀賞、審査員特別賞・名和晃平賞を受賞。

本学八王子キャンパス絵画棟棟にあるアトリエにて

Whoops[ウープス] 2014 AUTUMN Vol.8

◎発行日=2014年11月1日

◎編集長=小川敦生

◎編集=荒井洋平、今井楓、大村良輔、加藤千裕、韓松鈴、河野からら、小林真弓、清水千里、菅原海人、田草川健太、地引朋子、中村昂史、林勇太、正田健一郎、秀島朱美、萬代とし、宮坂咲紀

◎誌面デザイン=梅美沙(AD)、中村愛、並木結花、古澤旅人、萬代とし、宮坂咲紀

◎撮影=荒井洋平、小川敦生、萩原亮太郎、今井楓、大村良輔、韓松鈴、河野からら、菅原海人、鳥越離子、林勇太、正田健一郎、秀島朱美

◎表紙写真=①SUIKO「色、カタチ、生命/letter〜酔狂〜」=「おおいとイレンナーレ」出品作 [photoyasunori takeuchi] (P.6) ②歌舞伎役者の中村京蔵さん (P.10) ③「movie大戦アルティメイト」にて新造された「アグマイザー」と大嶋修一監督の作った「装甲車」(P.7) ④「GARBAGE BAG ART WORK」の「ゴミ置き場をアートにするプロジェクト」より (P.6) ⑤東京都現代美術館で展示された『憑依する滝、人工衛星の重力』(P.8)

◎発行=多摩美術大学芸術学部芸術学科フィールドワーク設計ゼミ  
〒192-0394 東京都八王子市鐘水2-1723

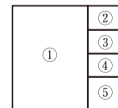
◎印刷=株式会社ハシモトコーポレーション

◎問い合わせ先=whoops.tamabi@gmail.com

◎Twitter=@aogawageige77

◎Webzine「タマガ」=QRコード

●掲載記事の無断転載を禁じます



## ラストスパート!



芸大美大が母校になる

SAPIX YOZEMI GROUP

代々木ゼミナール造形学校

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-62-3 ☎0120-71-4305  
JR原宿駅竹下口徒歩1分/東京メトロ明治神宮前駅2番出口徒歩3分

## ザ・シンフォニカ 第57回定期演奏会

日時 2015年2月15日(日) 13:30開演

会場 すみだトリフォニーホール

プログラム

ドビュッシー/管弦楽のための映像より『イペリア』

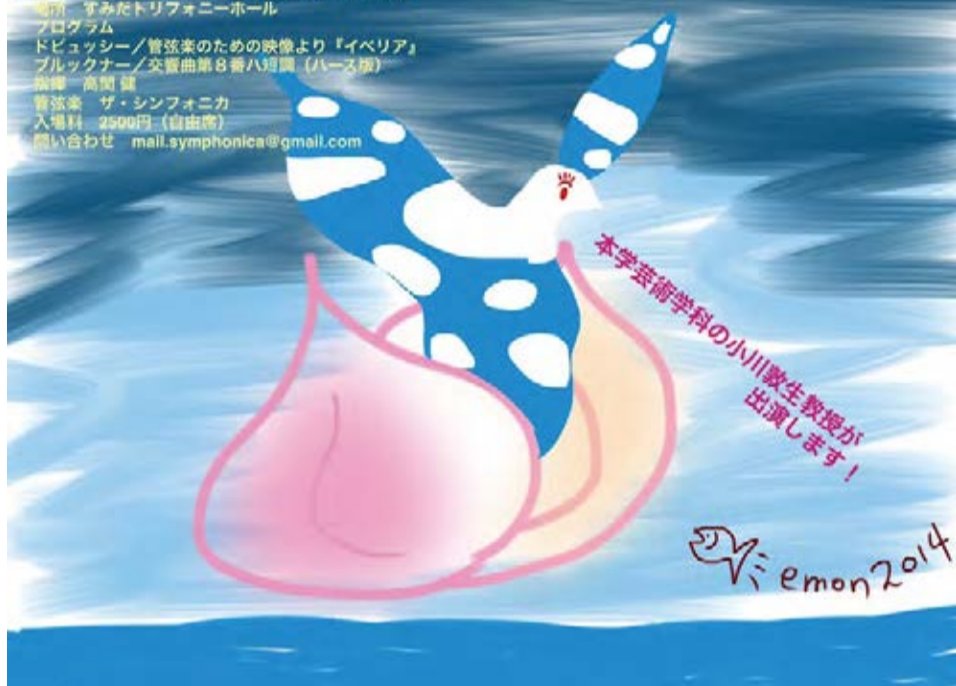
ブルックナー/交響曲第8番ハ短調(ハース版)

指揮 高岡 賢

管弦楽 ザ・シンフォニカ

入場料 2500円(自由席)

問い合わせ mail:symphonica@gmail.com



# 額・画材・デザイン用品

# 多摩美術大学生支援セール

実施中のお知らせ!! 学校まで直接配達だから便利!!

- 張りキャンバスが安い!
- 木枠、木製パネルが安い!
- カットキャンバス、ロールキャンバスが安い!
- 油絵具、画溶液が安い!



\*\*\*\*\* 安い価格のほんの一例 \*\*\*\*\*

|                             |                      |
|-----------------------------|----------------------|
| 世界堂製張りキャンバス(カルワク) F100      | .....大特価 ¥10,500(税込) |
| 世界堂製木枠(杉材) F100             | .....大特価 ¥9,400(税込)  |
| 木製パネル F100                  | .....大特価 ¥9,000(税込)  |
| カットキャンバス 船岡製 麻100%(中目) F80  | .....大特価 ¥4,000(税込)  |
| カットキャンバス 船岡製 麻100%(中目) F100 | .....大特価 ¥4,500(税込)  |
| 世界堂製画溶液ペインティングオイル 1,000ml   | 40%OFF ¥2,460(税込)    |
| 世界堂製画溶液テレピン 1,800ml         | 40%OFF ¥4,200(税込)    |
| 世界堂製ブラシクリーナー 2,000ml        | 40%OFF ¥1,420(税込)    |
| 世界堂ロールキャンバス 140DX 中目        | .....大特価 ¥19,400(税込) |
| 世界堂ロールキャンバス C&TC 中目         | .....大特価 ¥15,800(税込) |
| ホルベインアクリラジェツソ 900ml 詰替え     | .....大特価 ¥1,600(税込)  |

詳しくは校内設置、又は配布しておりますチラシをご覧ください。

ご注文、問合せは (株)世界堂 多摩美術大学生支援セール係

E-mail gaisho@sekaido.co.jp FAX.03-5360-4010 TEL.090-3716-4575

豊富な品揃えと満足プライス日本最大級専門店チェーン

新宿本店 TEL.03-5379-1111

|         |                   |               |
|---------|-------------------|---------------|
| 池袋バルコ店  | (池袋バルコ 6F)        | ☎03-3989-1515 |
| 立川北口店   | (NIS WAVE.1ビル 5F) | ☎042-519-3366 |
| アートマン店  | (京王アートマンA館3F)     | ☎042-337-2583 |
| 町田店     | (町田市原町田4-2-1)     | ☎042-710-5252 |
| 相模大野店   | (相模大野モアーズ4F)      | ☎042-740-2222 |
| ルミネ横浜店  | (ルミネ横浜 8F)        | ☎045-444-2266 |
| ルミネ藤沢店  | (ルミネ藤沢 4F)        | ☎0466-29-9811 |
| 新所沢バルコ店 | (新所沢バルコLet's館3F)  | ☎04-2903-6161 |
| 名古屋バルコ店 | (名古屋バルコ東館5F)      | ☎052-251-0404 |



インターネットでお買い物 SEKAIDO ON-LINE SHOP

http://webshop.sekaido.co.jp/

世界堂オンラインショップ 検索

# 世界堂

情報満載!世界堂のホームページ http://www.sekaido.co.jp/

# 起 源

2014  
10月18日 .sat → 11月9日 .sun

多摩美術大学美術館  
開館：10:00→18:00 (入館は17:30まで)  
休館：火曜日 入館料：無料



# 堀浩哉展

KOSAI HORI EXHIBITION

## 多摩美術大学美術館

休館日◎ 毎週火曜日  
(但し 12月23日は開館、翌24日〈水〉休館)  
年未年始 (12月28日～1月6日)

開館時間◎ 10:00～18:00 (入館は17:30まで)

入館料◎ 一般300円(200円) 大・高校生200円(100円)  
※堀浩哉展は入館無料  
( )は20名以上の団体料金  
障がい者および同伴者、中学生以下は無料

〒206-0033 東京都多摩市落合1-33-1

電話◎ 042-357-1251

URL◎ <http://www.tamabi.ac.jp/museum/>

交通◎ 多摩センター駅 徒歩7分  
(京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール)

### 【堀浩哉一起源 関連イベント】

- 講演「そして、堀浩哉」  
10月18日(土) 14:30～16:00 会場：多摩美術大学美術館 B1F 多目的室  
千葉 成夫 (美術評論家、中部大学教授)
- 対談「47年目の〈今、ここ〉から」  
11月9日(日) 14:00～15:30 会場：多摩美術大学美術館 B1F 多目的室  
榎木 野衣 (美術評論家、多摩美術大学美術学部教授) 堀 浩哉
- 公開授業  
11月6日(木) 14:00～15:30 会場：多摩美術大学美術館 展示室  
堀 浩哉 蔵屋 美香 (東京国立近代美術館美術課長)  
対象：油画専攻3年生グループ3 / 他一般見学者聴講自由

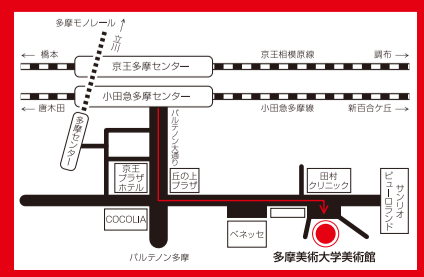
### 【祈りの道へ四国遍路と土佐のほとけー 関連イベント】

- 講演会「祈りの道へⅠ・Ⅱ」  
11月22日(土) 14:00～16:00  
I部「土佐、祈りの原風景」  
青木 淳 (多摩美術大学・本展監修)  
II部「霊場住職と語る《四国遍路》」  
坂井 智宏氏 (第26番霊場 金剛頂寺 住職・真言宗豊山派 宗務総長)  
聞き手 青木 淳
- 講演会「土佐、古仏との対話」  
12月7日(日) 14:00～16:00  
青木 淳
- 講演会「昭和の遍路と平成の遍路」  
12月14日(日) 14:00～16:00  
星野 英紀氏 (大正大学元学長・大正大学名誉教授)
- 講演会「発掘へんろー考古学から見てきた高知の特色ー」  
12月21日(日) 14:00～16:00  
廣田 佳久氏 (高知県教育委員会 文化財課 専門企画員〈文化財担当〉)
- 講演会「野田廃寺出土博仏の周辺」  
12月23日(火・祝) 14:00～16:00  
淵田 雄 (多摩美術大学美術館学芸員)
- 講演会「空海の時代ーその歴史と造形ー」  
2015年1月11日(日) 14:00～16:00  
大橋 一章氏 (早稲田大学名誉教授)

各回会場：多摩美術大学美術館B1 多目的室  
各回定員：先着100名 (聴講無料、但し入館料が必要です)

●学芸員とのギャラリーツアー 各回 13:00～14:00  
11月26日(水)、12月10日(水)、2015年1月14日(水)  
会場：多摩美術大学美術館展示室 (参加無料、但し入館料が必要です)

本展特設サイト◎ <http://www.tamabi.ac.jp/museum/inorinomichihe/>



# 祈りの道へ

四国霊場  
開創  
1200年記念

ー四国遍路と土佐のほとけー

2014  
11月22日(土)

↓  
2015  
1月18日(日)

多摩美術大学美術館

大日如来坐像「四国遍路と土佐のほとけ」展、大正大学

主催：多摩美術大学美術館  
共催：高知県立歴史文化財センター(公財)財団法人高知県文化財団  
後援：四国八十八ヶ所霊場会、四国八十八ヶ所霊場会 土佐霊会  
高知県仏教会、高知県仏教青年会  
高知県、高知県教育委員会、高知新聞社、RKC高知放送  
協力：高知県立歴史民俗資料館(公財)財団法人高知県文化財団  
おへんろ交流サロン